九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[27] radix : 九州大学全学共通教育広報

https://hdl.handle.net/2324/20392

出版情報：radix. 27, 2001-01-15. 九州大学教養部大学教育研究センター
バージョン：
権利関係：

radix

radix（ラーディクス）は，根，根源を意味するラテン語。ヒトの根源にまなざしを向け，豊かなこころの根を広げたい。

2001. 1. 15
九州大学全学共通教育広報 No. 27

夏空二景（2頁参照）撮影　津村正樹

表紙写真説明

夏　空　二　景

夏に入ると，空はとたんに表情豊になってきて，心が躍る。夕方の空は特に，何が起こるか予断を許さない。車を西に走らせて帰宅する途中，目を見張るような空に出くわすことがときたまある。こういう時は一刻を争う。何といっても，未来永劫にわたって決して再び目にすることのできない光景なのである。車をすっ飛ばして家にたどり着き，息せき切って階段をかけ上り，カメラをもってベランダに出る。ベランダの手すりには，いつでも使えるように，自由雲台が手製の固定具で常時据え付けられている。露出時間を秒単位でとらなくてはならないこともあるからである。

カメラを据えたのは今津湾に面した小戸の海岸べり，彼方の西側に見えているのは糸島半島，撮影したのは８月20日とその数日後である。

１月にでるという本号であるから，冬の荒れた海の光景でも載せたいところなのだが，写真提出の期限が11月初旬ということもあり，また，写真帳をのぞいても夏空の写真ばかりということもあり，それで，このような季節はずれのものを出すしかなかった。寛恕を請うほかない。南半球への旅行の際に撮影したものとでも想像していただければありがたいのだが・・・・　（言語文化研究院　津村　正樹）

ドン・キホーテのごとくとも……薄　俊也…3
世界・日本　8
Ma vie, l'été de ma vie ……辰島　啓太…6
ライス大学への交換留学体験記
岩波　由佳…8
唐津くんちにみる男性文化と女性文化
深川ひろみ…9
教育方法改善の試み　2
英語共通教科書の導入……12
－A Passage to English－
徳見道夫　大津隆広　鈴木右文
Laputa Project ……岡野　進…14
ＶＴによる環境教育の実践……友清　彬昶…16
公開講座……18
『現代社会の諸問題を考える』を終えて
毛利　嘉孝
「フィールド科学研究入門」と九州大学演習林
西村　潤二…20
サークル紹介　19
弓道ってなぁに？……仲田　芽衣…24
新任教官自己紹介……25
荒谷　邦雄・石川　健・鏑木　政彦
趙　葵欣・原田　恒司・P. BACKLEY
あとがき……28

投稿・写真歓迎

編集委員会では radix への投稿，紙面を飾る写真を募集しています。あなたが関わっている様々な活動，六本松地区や「全学共通教育」にまつわる出来事，六本松の思い出など，六本松や「全学共通教育」に関するものであれば何でも結構です。

写真も，キャンパスでのもの，旅先でのものをはじめ，あなたの作品，ぜひ紹介したい知り合いの作品など，広く募集しています。応募，推薦の対象は六本松や「全学共通教育」に関わりのある全ての方です。

radix 学生モニター募集

編集委員会では radix に対する学生の意見を広く聞こうと，今年度よりモニターを募集し，「学生モニター会議」を開くこととしました。また学生編集委員も募集しています。学生の皆さん，多数ご応募ください。募集は常時行っています。

投稿，写真，モニターの応募は下記で受け付けます。

編集委員　石田　清隆（比文☎4639）　小山　紘三（大教セ☎4585）　西村　秀樹（健セ☎7847）
濱野　清志（ｱﾄﾞﾐｯｼｮﾝｾ☎4805）　福元　圭太（言文☎4693）　松崎　誠一（事務部☎4506）
毛利　嘉孝（比文☎4594）　山村ひろみ（言文☎4655）
企画掛　☎4526　本館１階西側

ドン・キホーテのごとくとも

1974年工学部入学 薄（すすき） 俊也（しゅんや）

こんにちは。私は，工学部建築学科出身です。修士課程を経て昭和55年，福岡市役所に建築技術職として入りました。早いもので，もう20年が経ちました。

ところで，私は専門の建築学以外に学生時代から続けていることがあります。それは，彫刻等の創作活動です。学生時代，建築デザインや都市計画を学んでいて，「美しい建物や都市とは何か。」「それらを人々はどうして美しいと思うのか。」という問いに悩まされました。すなわち，「建物や都市の美的評価基準が存在するのか。」という命題にとりつかれてしまったのです。それで，ヘーゲルやスターリンの弁証法を軸にして論理的に考える一方，実践的手法として彫刻を始めました。下の作品は，九大医学部の留学生に協力していただき昭和57年に完成した彫塑です。石膏の上にブロンズ塗装をしています。

昭和61年から平成元年の４年間，アジア太平洋博覧会協会に所属し，博覧会の会場計画から，パビリオン等の建設および解体まで携わりました。そのころ，日本の景気は異常な伸びを示し，バブル経済へ突入。建物の価値が土地価格の上昇についていけず，新築同然の建物までが崩される不幸な事態が訪れていました。私には，その状況が，たった半年で解体・撤去されていく博覧会の会場やパビリオンの無残な姿と重なって見えました。

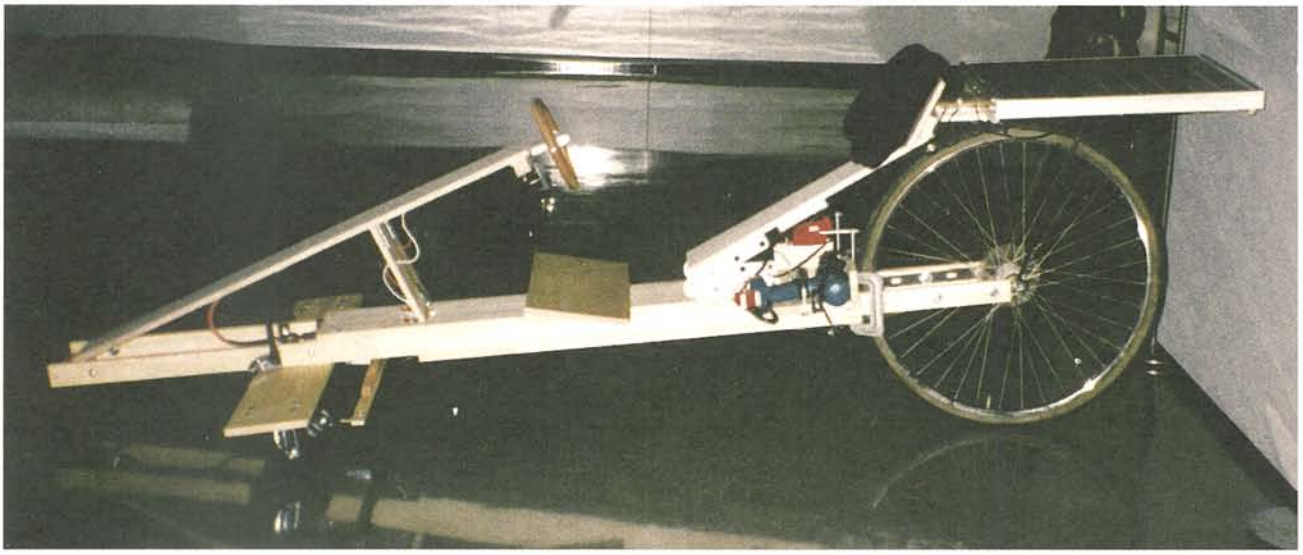
その後，ヨーロッパやオーストラリアを旅して，ヨーロッパのように古い建築物群の中で生まれ育った子供たちと，日本のように建物が使い捨てされる中で「ものを大切にしましょう。」と言葉だけの教育を受けて育った子供たちとの差異を意識するようになりました。これを機に，環境と子供たちという新たな視点が私に加わりました。

下の作品は，廃棄自転車の前輪を風車にして，回転するとタイヤの部分に入っているたくさんの豆粒が卵のパックに当たりザーザーと波の音をたてる「リサイクルアート」です。名づけて「自然からのメッセージ」。子供たちに大人気でした。　平成５年作

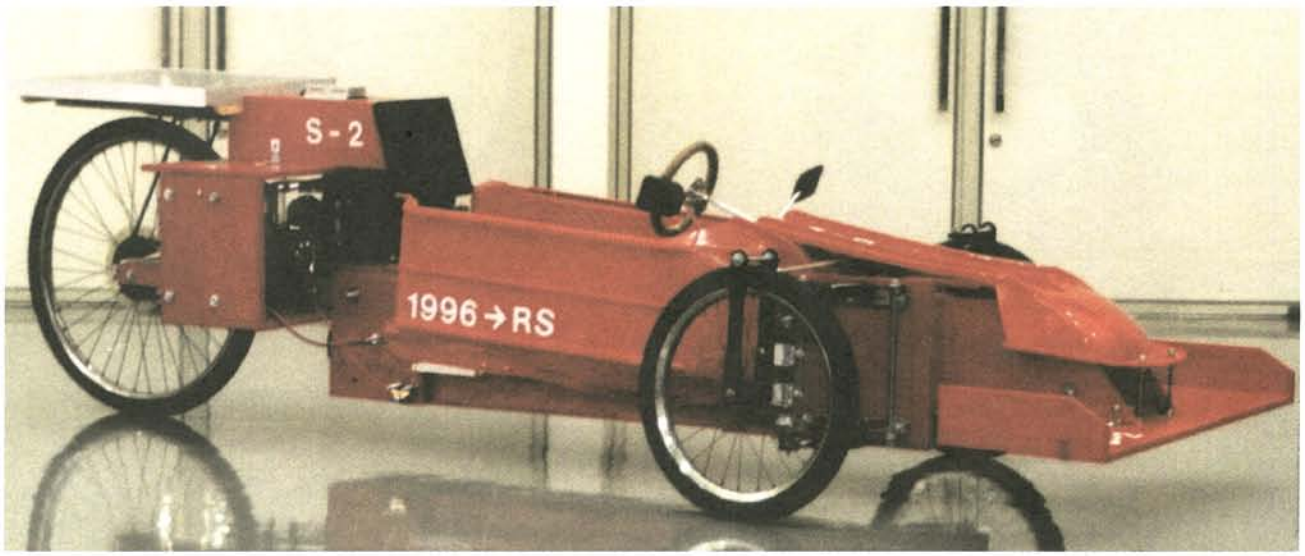
私は，愛宕山の海側で室見川の西側に位置する豊浜団地に30年近く住んでいます。住み始めたころは陸の孤島とよばれ非常に不便なところでしたが，反面通過交通はなく牧歌的風情がありました。しかし，博覧会で室見川に橋がかかり福岡ドームや福岡タワーのあるシーサイドももちとつながるや否や団地周辺には大型店舗が出現しあっという間に交通渋滞地区へと変身しました。

ある朝，雨上がりの車のボンネットに残された何本もの黒い雨跡が，大気汚染の深刻さを物語っているように感じられ，自動車の排ガスを何とかしなければならないと考えるようになりました。それで，たまたま，オーストラリアのソーラーカーレースをテレビで見たとき，クリーンなエネルギーで走る自動車を作ることが自分の使命と感じたのです。

自動車作りはソーラーパネルを入手することから始めました。最初，ソーラーパネルメーカーに問い合わせても，相手にしてもらえませんでした。単なる冷やかしと思われたようです。また，職場の同僚や友人たちもソーラー電気自動車を作ることなど単なる冗談としか受け取っていなかったようです。そのころの主な部品調達手段は粗大ゴミ置き場から廃棄自転車を拾ってくることでした。私にとってゴミ置き場は宝の山でした。この時期に製作した2台（S－1，S－2）は，まさしく，ゴミから生まれたリサイクル・ソーラー電気自動車でした。



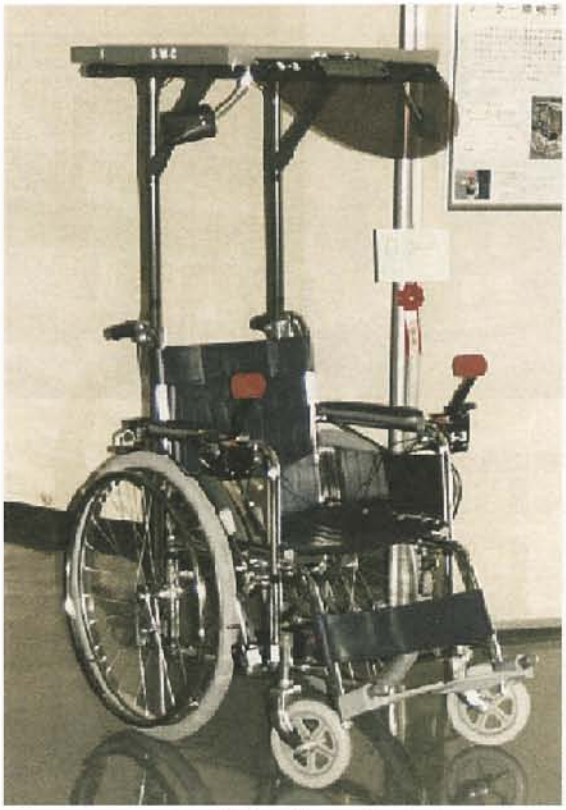
S－1　軽くするために木製とし，オートバイと自動車の中間的なものをねらった。　平成5年作



S－2　木製のシャーシーに草スキー用ソリを加工し取りつけた。　平成8年作

しかし，平成９年，ゴミ回収のルールが変更され粗大ゴミ置き場はなくなりました。そのためゴミからのリサイクル部品は減少し，その分，製作の費用はかさんでいきました。３作目は購入した新品の車椅子に屋根状のソーラーパネルと二つのモーターを取り付けたソーラー電動・車椅子（Ｓ－３）。４作目は新品の電動アシスト自転車をもとにしたソーラー電気自動車（Ｓ－４）。そして，現在取り組んでいるのは，ほとんどが新品部品で構成される４輪駆動のソーラー電気自動車。この10年間に費やしたお金は，ちょっとした新車が買える額に達しています。

以前タイム誌に，環境問題の観点から，将来，自動車はガソリン車から電気自動車に変わる記事が掲載されていました。そして，そのエネルギーの主流はソーラーではなく燃料電池であるという論調でした。私もそうなると思っています。しかし，現在，燃料電池は素人が入手できる代物ではありません。自分でやれること，それはソーラーパネルを利用した電気自動車作りです。素人でも素人なりの理想のものが具現化されれば，周囲への波紋はあると信じています。アマチュアとして，一人一人が何かしら自分たちのできる範囲で環境を良くしようと努力することが，地球を救う第一歩だと考えています。たとえ，それがドン・キホーテのごとくとも。



Ｓ－３　手動も可能　平成９年作

Ｓ－４　モーター２個，自転車にもなる。　平成10年作

昨年の９月，スイスのカーフリー・リゾート地（ガソリン等の燃焼燃料を使う車の乗り入れを禁止している保養地）ツェルマット村を調査してきました。調査の目的は，国から補助金を受けることなく開発と保存を調和させ，持続可能な発展を続けているツェルマット村の政策を，環境，自治，財政，教育の観点から考察し，福岡市政の参考にしようというものです。

現在，そのレポートを書いていますが，具体的な応用例として，環境問題で話題に上っているアイランドシティを取り上げる予定にしています。

機会があれば，この続きをお話したいと思います。それでは，また。　（福岡市役所農林水産局勤務）

世界・日本

Ma vie, l'été de ma vie

医学部２年 辰島啓太（たつしまけいた）

１．パリの孤独～フランス最後の日記より

「じゃあ，また日本でね。メール書くよ。Bon voyage!!」８月31日朝。僕はパリでひとりになった。ボルドーからパリまでＴＧＶで３時間。僕の帰国フライトは２日後だ。一ヶ月を共にした友人たちを見送る。予定通りの独りのパリ。しかし今，僕はとてつもなく大きな孤独の中にいる。来たときにはこんな孤独を感じることはなかった。それはきっとここで得たものの大きさを物語っているのだろう。様々な文化，歴史，生活，そして何よりもすばらしい人たちとの出会い。この先もう二度とできない経験ができたのだと改めて実感することでそのものたちへの愛情はただ増し，もうあの時あの場所へは戻れないのだということを知った。これは僕にとって大きな収穫だ。日本では繰り返される日常に輝きを見つけにくいと感じていたが，結局すべては自分次第なのだ。もちろんこんな陳腐な表現では言いつくせないのだが，より人間らしく生きること，生活を楽しむことをこの国の人々は知っている。学ぶべきことはまだまだたくさんあり，それを考えはじめると僕の胸は高鳴る。この１ヶ月，短かったけれど僕は確かにこの国で「生活」というものを経験した。

２．ボルドー

ボルドーはフランス南西部，大西洋に面したアキテーヌ地方の中心都市として古くから栄えた街である。ガロンヌ川からエスチュアリーになったジロンド川にかけては貿易港で，奴隷貿易やワインの輸出が盛んに行われていたことでもよく知られている。そのため，街はイギリス系ブルジョワ階級と黒人に溢れる。市街地には古き良き時代の栄華を偲ばせるような素晴らしい建造物が当り前のように転がっている。歴史，人々がカオスとなって，ただそこに存在しつづける街。変化と永遠の調和。その存在感にただ驚かされる。雑然とした街並みに多種多様な人々。大声を出す商人，口をぽかんと開けた観光客，けんかする夫婦，カフェで語らう恋人たち。人間味に溢れたこの街を僕はすぐに大好きになった。午後の授業がない日は，街へ出て，その空気を吸う。異国の地で時々迷うこともあったけれど，どれほどこの街の温かさに癒されたことだろう。ワインだけではないボルドーの魅力は行ったことのある者にしかわからない。

ボルドーの市街地の路地裏にて

３．学校に通う８月

僕が参加したのはボルドー第３大学のフランス語夏期講座。毎年福岡市の姉妹都市であるボルドー市から九大の学生１名が招待されているプログラムだ。そこでは世界各国から職業も肌の色も違う人々が集まってフランス語を勉強する。僕のクラスはドイツ，スペイン，トルコ，韓国，日本から12名が１ヶ月机を並べた。職業もさまざまで，学生，ソムリエ，弁護士，医師，教師など。教室ではフランス語のみを使用するのだが，スペイン人密度が高いこともあり，密やかに（いや結構大っぴらに？）スペイン語が横行していたような気もする。また寮生にフランス人はいないが，同年代に限らず友達ができ，会話技術の向上はここに尽きたと言える。ただそう言うのは簡単だが，最初は辛くもあった。ヨーロッパの人々は大学生でもフランス語を学びはじめて５～７年というのが普通で，またフランス語を始めて１ヶ月というスペイン人も会話となれば，きちんと成立しているからだ。思うように聞き取れず，言いたいことも言えないもどかしさが僕を襲った。しかしそんな状況から僕を救ってくれたのもフランス語だった。気晴らしにドライブやカフェ，海に連れて

行ってくれた友達もいた。ボルドー大学のフランス人学生で，たまたま友達になれたシャルルは積極的にフランス語を教えてくれた。暖かい人々に支えられ過ごしたこの夏を，僕は生涯忘れないだろう。フランス語を学ばなければ出会えなかった。人生とは運命なのか，選び取っていくものなのか，ふとそんなことを考えた。

4．医学生として　そして世界人として…

出会いと言えば，学校で大変お世話になったMme. Ponzoがいる。フランスへ旅立つ前，郵便ストのため，書類面で不安を抱えて現地へ向かったのだが，彼女のおかげでなんとか生活をスタートさせることができた。僕が医学生であるということも知っていて，ある日僕をフランスの病院見学に招待してくれた。ベトナム人医学生たちと一緒にボルドーで最も優れた施設を持つ病院を訪れ，手術室や病棟などを見学した。彼らはフランス語の聞き取りに高い能力をもち，大学では第1外国語として英語だけではなくフランス語も選択する余地があると教えてくれた。現在，日本の医学部では英語が独占的で，英語ができないと相手にされない等とよく言われるが，国によってこんなにも違うものなのか。彼らはフランス語を選択し，ここへ奨学生としてやって来た。両国間の決して消えることのない歴史に想いを巡らせたのは言うまでもない。

サマースクールには様々な国から学生が来ており，そうした状況で政治的な問題を話すことの難しさはこの上ない。互いを否定したくはない。貿易摩擦，戦争，文化・宗教の違いといったことは言葉を選ばないと大変なことになる。普段日本で何気なく口にしているようなことや，全く意識しないことについてじっくりと考える大変よい機会になった。こうした感覚は大陸の感覚というか，国境の感覚に近いものがある。幼い頃から経験的にそれを身につけたヨーロッパの人々の視点はグローバルで，残酷なまでに率直だがどこか優しい。長い歴史と宗教が弱者の痛みを理解する意識を育んできたのだろう。宗教のためにする戦争は絶対に認めてはいけない。しかし神の教えは社会に根づき，よい一面も存在することも我々は知るべきだと思う。

シャトーマルゴの正門前

ところで僕は現地で体調を崩したことがあった。今度は患者として病院を訪れることになったのだ。行ったのは個人病院であったが，非常に美しいサロンのような診察室で，リラックスできる空間。しかし当の本人，つまり僕はそれどころではなかった。フランスの保険証ももっていないし，法外な請求をされたらどうしようと，そればかりを考えていたからだ。5～6分の待合時間が永遠に感じられた。結果は…日本の初診より安いのではないかという額。一気に肩の力が抜け，ほっとしたことを覚えている。処方された薬よりそちらの安堵感の方が効果があったのではないか。全くもう。しかし僕のために率先して病院の予約をとってくれた先生と，ご主人の車で病院・薬局に連れて行ってくれた司書の方のお気持ちは本当に嬉しかった。今回の滞在では病院に関して，医学生の僕にとって大変貴重な経験をすることができた。

5．これから…

いろんな思いを胸に日本に帰ってきて少し時間が流れた。今改めて感じるのは，行って本当によかったということだ。よく学び，（ここには書いてないが実は）よく遊んだ。その中で僕は「結構成長できたかも。」と内心思っている。まずは踏み出してみないと何も始まらない。今回は大きな力に背中を押された形だったが，この旅で僕の人生のあり方は少し変化した。

フランスと日本はようやくパートナーシップをとりはじめた段階に過ぎないと僕は思う。日本における一般的なフランスの印象はあくまで表面的なもので，もっと深い本質的な出会いがはやく来ることが望まれる。そのために今僕にできるのは，フランス語を続けていく事だろう。言葉に対して人は謙虚でなくてはいけない。或る表現をなぜそのように言うのか。それを知るだけで，フランスを知ることも可能だから。その新鮮な発見を大切にし，これからも大好きなフランスと相思相愛になれるよう自分を磨いていきたい。

なお今回の機会を与えてくれたボルドー市，ボルドー大学，そして言語文化研究院の先生方に深く感謝している。ありがとうございました。

世界・日本

ライス大学への交換留学体験記

(1999年8月～2000年8月，アメリカヒューストン)

1996年法学部入学 岩波由佳（いわなみ ゆか）

Residential College, Beer Bike, Powder Puff...これらはライス大学特有のもの。学生数2500人という小規模なライス大学だからこそ，他大学にはできないことが実現できるのです。上記のものはその典型的な例ですが，Residential College が基礎をなし，一番の特徴であったと思います。

Residential College というのは，80%の学生が大学の敷地内にある寮に住むというシステムです。ライス大学には8つの寮がありそれを College と呼びます。1つの寮には300人強の学生が住んでおり，朝・昼・晩と食事，そして行事をともにするので同じ寮の人はほぼみんな知り合いということになります。寮の行事の代表的なものに Beer Bike を挙げることができます。この日は8つの寮がビールの一気飲みと自転車競争をします。しかしその競争の前に8つの寮がそれぞれ1万個の水風船を作って敵（残りの7つの寮）に投げまくるパレードを行います。このようなクレイジーな寮システムのおかげで私は留学生といえどもすっかり溶け込むことになってしまいました。しかしそれは結果論であり，実際は留学生が1%のライス大学で，アメリカ人に囲まれての生活のスタートは大変でした。

留学生として初めに感じた文化の違いは，「人種の坩堝（るつぼ）」であるアメリカ社会と単一民族国家に近い日本社会の違いから生じました。留学前に日本で留学生のチューターとして活動していましたが，日本では留学生はお客様扱いです。何から何まで世話をする，というのが少なくとも九大の留学生受け入れ態勢でした。それを直に見てきた私はライス大学でカルチャーショックを受けることになったのです。アメリカにはいろいろな人種が共同生活をしています。ライス大学にはアジア系アメリカ人は30%ほど，ヒスパニック系も30%ほどいました。アジア系の顔の私は珍しくも何ともなく，まるでアメリカ人であるかのように扱われました。当然普通のスピードで英語を話されました。アメリカ人と一緒に「あさってまでに300ページ」のリーディングの宿題も出されました。

英語だけでなく，友達作り，コンピューター知識においても困難を極めました。日本人だったらすぐに友達ができて人を笑わせることができるのに，アメリカ人同士の会話に突っ込む隙をみつけるのが難しくおとなしい日本人になっている私に苛立ちました。宿題の問題は分かるのに，それを提出するのにコンピューターで表をつくって棒グラフも作らないといけない，しかもそれをパワーポイントで発表…，24時間オープンの図書館でコンピューターと一緒に寝ました。

また，国民性の違いも挙げることができると思います。アメリカ人といってもいろんな人がいるので，「国民性」と一括りすることはできませんが，それでも一般的なこととして自立性，積極性，個人主義が挙げられるでしょう。大学の1機関として学生を罰する司法機関がありますが，その運営も学生がしています。寮長も寮の会計も全て学生で，1個人が多くの責任あるポジションで自立して企画・運営に携わっています。大学のボランティア団体も全て学生で構成され，近隣国のメキシコ，グアテマラへ毎年20名程度のグループを組んで経済，福祉の面で援助をしています。

このような社会では受身は禁物だと気がつきました。パーティーに誘われなかったら「なんで誘ってくれないのかな」の受け身な考えではなく，「明日の予定は？私もパーティーに行きたい！」と積極的に行動を起こさないといけないのです。それで，全然興味のなかったアメリカンフットボール女子チーム（Powder Puff）にも入りました。週3回の練習と毎週末試合がありました。半年経つと，たくさんの友達ができていました。

アメリカ留学はアメリカ社会を知ると同時に日本を客観的にみることもできました。日本の国際化の遅れを実感しました。まだ日本は外国人が珍しくない社会にはなりきっていません。一方，アメリカは，外国人を多く受け入れていますが，受け入れ後の問題を抱えています。例えばアメリカに住むヒスパニックは人口のわりに未だ就労問題を抱えており，貧困地区での生活を強いられていました。この1年間の留学は国際社会を知るという意味で本当に有意義であったと思います。また，この時知り合った友人の中に一生涯の親友と呼べる人もできました。この経験と友人は私の人生で貴重な財産となりました。この機会を与えて下さり，応援して下さった皆さんに本当に感謝しています。

唐津くんちにみる男性文化と女性文化

比較社会文化研究科修士課程２年　深川（ふかがわ）　ひろみ

2000年11月２～４日，300年余の歴史を持つ唐津くんちが無事に終了しました。

各新聞は次のようにカラー写真入りで大きく報道されていました。『唐津くんちフィナーレ　３日間で52万』（佐賀）・『「町廻り」でフィナーレ　曳き子ら“完全燃焼”』（西日本）・『勇壮くんち52万人酔う　唐津３日間の祭りに幕』（朝日）等。テレビもＮＨＫ・ＳＴＳ・唐津ぴーぷる放送が３日のお旅所神幸を２時間実況中継し，４台の曳山の曳き込み，臨場感あふれる喧騒の状況を各家庭に届けました。

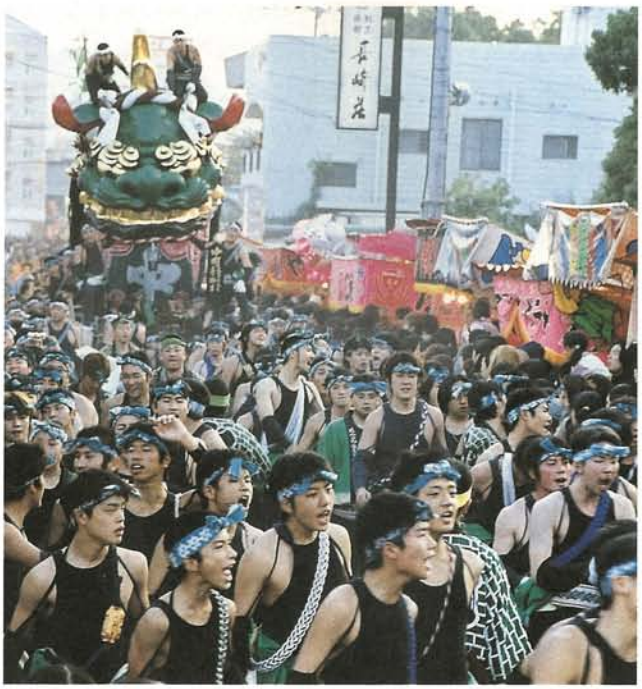
■唐津くんちの成立

一般に唐津くんちとは，唐津神社の秋祭であり，そこで行われる曳山行事のことをさします。歴史を振り返りますと，それは寛文年間（1661～72）からの起源を持ち，当時は神輿の御神幸に各町から「走りヤマ」がお供していたと記されています。祭のヤマは神の憑代の意義を減じ，余興のための作り物としての意義をもつとされ，当初から毎年さまざまな趣向が凝らされてきたようです。けれども1819年にある一つの町の「走りヤマ」が突如大変身し唐津の人々をびっくりさせます。刀町がそれまでの「走りヤマ」を５ｍを越す真紅の漆塗りの赤獅子に作り変えたのです。それから，他の町は競いあって，57年の間に15台の曳山を制作しました。それ以降，曳山の御神幸への参列順は制作順となり，それを制作した各町は曳山の運営と管理を任され現在にいたるまで維持してきているのです。

■現在の唐津くんち

さて，現在の唐津くんち行事は神祭という信仰色はほとんどなくなり，市民のイベントとして，また観光の目玉として重要視されています。それは次の３つの要素から構成されています。

まず，曳山の華麗さと壮大さです。14台の曳山は佐賀県重要有形民俗文化財（1958）に指定された世界最大級の漆塗りで，一閑張の作り物としての美術的価値があることで知られています。２つ目の要素は，国の重要無形民俗文化財（1980）とされたこの伝統行事を，長い歴史の中で一度も途切れることなく維持してきたという誇りです。昭和天皇のご病気で各地のまつりが次々と取りやめられた年も唐津くんちは行われ，全国から注目を浴びたこともありました。自分の町の組織と唐津くんちの年中行事は，町内男性にとっての生きがいでもあるのです。



そして切り離せないのが“饗応”です。曳山を維持してきた各町内はもちろん，市内の他の多くの家でも，親戚・友人・知人・様々な人を各家庭に招待し，その家の女性が用意したくんち料理で接待し振舞うのです。これを“饗応”と言います。町じゅうの家がホームパーティーをやっているといった感じです。

■男性の役割と女性の役割

私はこの唐津くんちの男性と女性の役割を調査し，それがどのような文化を作っているのかを研究しています。たとえば，曳山を曳くのは男性，家で饗応を行うのは女性という図式があります。オモテの従来の儀式を維持していくのは男性で，ウチの一切を取り仕切るのは女性という図式です。それらが表裏一体となったものがくんち行事となり，これが唐津の重要な社会活動となっています。「正月には帰らんでもくんちには帰る」といって，唐津を離れた人たちはくんちには必ず帰ってきて家族や友人と祭りを楽しみます。「伝統を守らにゃいかん」と人々は一年中くんちの年中行事やまつりごとを大切にしています。

しかし，この唐津くんちのあり方も男女の役割分担もずっと固定化されていたのではありません。長い間に唐津くんちは時代の必要に迫られその都度修正されてきました。はじめの大きな要因は，藩政から明治への移行期に起こった，それまで権勢を振るった大商家の没落とそれに付随する町の地図の変化でした。曳山制作の大スポンサーであった御用商人の多くがその経済力と政治力を失って失脚し，代わって移入してきた新町民がその町を伝統もろとも引き受けることになります。御用商人がしていた顧客の接待と曳き子へのもてなしは，引き継いだ商家のその商家の方法で新しく読み替えられ，その家の女性の流儀で実行されてきました。

昭和初期のくんち接待について85歳の女性にお話を伺う機会がありました。

「当時自転車屋をしていた父親が番頭さんと一緒に天秤からぞろびくように大きな“あら”（唐津くんちを特徴づける大きな魚）を買ってきましてね，それを大きな鍋で炊いて，それはどこにも負けない大きさでして父の自慢でした。女たちは三日三晩寝るひまもなく料理と接待に追われましたよ」

くんち料理が自転車購入者を接待客として振舞われていたということは次のようなことを物語っています。まず当時の自転車は公務員の月給の３，４倍の高価なものでしたからくんちの招待客になれるということは非常に名誉なことでした。お医者さんとか村長さんしか買えない物でした。しかし村の人々は自転車講なるものをつくり，講を落とした者がくんちの招待状をもらい，講の仲間全員を引き連れて接待に与っていたというのです（１枚の招待状で７，８人連れてきていた）。くんちに招待するものと招待されるものは別の力関係が働いていたようです。そしてそれは何より店主としての男性の財力を示すに充分な饗応でした。

一方女性は，夫や息子を実践力で支えてきました。それは決して表に出ない影の存在です。男性は町組織の一員としての体面を保つことで生き，女性は生活の実践の中で生きてきました。料理の献立を決定し，誰を加勢に呼ぶか，部屋をどう使用するか，料理を盛り付ける食器を何にするか，それらをどう調達するのか，それらは家々で異なり，こまごました工夫をし，采配を振るったのは一人一人の女性でした。

■くんち料理の変化

時代の変化と共に，くんち料理の内容も大きく変化します。昭和初期には薪の火力を使った，全てが手作業によるものでした。かまぼこはごちそうでした。魚を買ってきて下ろし，すり身にして練って形を作り蒸して色をつけるという作業です。ほかにお煮しめ，酢もの，ぬた，煮豆といった煮炊きして作るのがくんち料理でした。しかし，今ではすっかり様子を異にしてしまいました。くんち料理といえば，料理屋や仕出屋に頼んだ鉢盛と家で作るその家の女性たちのオリジナル料理を指します。後者では，中華ちまきと毬栗揚げが我が家のくんち料理というKさん，Sさんはカレーライスといい，Iさんは餃子というようにそれぞれが我が家のオリジナル料理を創意工夫しています。

■主体的に文化を作っている女性たち

夫は私が何を作っているのか知らないだろうといいながら，私が作った私の料理にこだわり，腕を振るう元気な女性たちがたくさんいます。女性の都合でくんち料理が取りやめになった男性はしゅんと沈んでいるそうです。

また，“あら”を取りやめるのに夫婦喧嘩で大変だったというある呉服屋の女性の話には力がはいっています。それは，昨年のくんちの時に“あら”を今年限りでやめましょうと家族で話し合っていたにもかかわらず，旦那がこっそり魚の注文をしていたのがくんち直前に発覚したことに始まりました。彼女の猛攻撃に旦那はタジタジだったそうです。見栄を張った数10万円もする“あら”ではなく，実質を取った女性の主導権，これがどうやら唐津くんちの実態のようです。それは，饗応を支えるこまごました作業全てを女性が引き受けているという実践力が彼女たちをしっかり後押ししているからです。

男性は伝統に対する誇りと責任感，組織なしでは動けないまつり行事と家の体面を保持するという守りの文化を持っているようです。それにたいして，女性は臨機応変に個々に合わせて実践しそれを自ら楽しむという逞しい文化を持ちあわせているのです。

曳山は，それを象徴とする歴史を人々に物語り，その動く様は勇壮で人々の思惑を吹き飛ばすほどの威力があります。曳山にマッチした法被姿はいなせで格好よく，沿道の観客やＴＶカメラに向かってスターになれることから，曳き子の希望者が年々増加しているという状況。昭和30年代までは町内だけでせいぜい４～50人位だったのが，現在は町外から多くの申し込みがあり，各町３～400人の曳き子が２本の綱を握っています。このように多くの市民によって，唐津くんちは現在もしっかり市民の財産として受け入れられ，その文化は少しずつですが着実に変化しつつあるのです。

教育方法改善の試み

英語共通教科書の導入

― A Passage to English ―

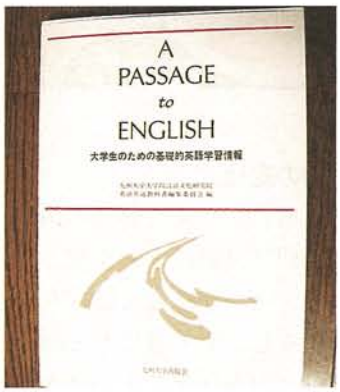
徳見 道夫　大津 隆広　鈴木 右文

導入の経緯

九州大学では長年にわたって50～60名規模の英語の授業が実施されてきた。英語教育はもっと少人数のクラスで行われるべきであるということは，多くの教官が指摘してきた。数年前から１単位だけ20名程度の少人数クラスを導入したので，教官としてもその効果はよく承知していた。そこで平成13年度からは，２年生の授業を，従来の規模の授業と徹底演習をはかる少人数制授業との選択制とすることにしている。

しかし，少人数授業が増加すれば，必要担当教官数も増える。だが，教育予算は決して潤沢とは言えず，教官増は望むべくもない。そこで，少人数授業を大幅に増加させるかわりに，一部に大人数の授業を設けざるを得なくなった。言語文化部英語科（当時）では，大人数授業の特徴づけを行うことを目的として，英語の授業全般で扱われている文法や音声などの様々な説明事項のうち，代表的なものをこの授業に集約させ，講義的な授業でもきちんと成立するようにしようと考えた。他の授業ではその分演習に打ち込めるようになる。このために，そうした説明事項等をまとめた教科書を編纂し，１年次に全員が「英米言語文化演習Ｉ」という科目として履修するようにしようということになった。そして英語共通教科書編集委員会(徳見，ローリングズ，大津，鈴木）が平成10年10月頃に設立されたのである。

構想を練る期間を含めて編集作業は２年近くに及んだ。英語科の各教官をはじめ，総長，副学長，各研究院長より，一部の執筆，校正，内容に関する助言や予算的措置に至るまで様々な協力を得て，平成12年10月25日に九州大学出版会から発行された。こうした援助に対し，編集委員一同感謝にたえない。平成12年度前期には原稿の段階で，後期には冊子を使用して，一部の授業でこの教科書が試用された。受講生の反応は概ね好意的で，編集担当者としてはこれに勝る喜びはない。



教科書の構成と使用方法

この共通教科書は形の上では第１部と第２部の２部構成である。さらに第１部は内容的に２つの部分に分かれており，前半の第１章から第９章までは英語の学習法，文法，音声，文化などに関する説明事項を書き下ろしの読み物の形でまとめてあり，第７章から第９章までは英文で書かれている。後半の第10章から第16章までは，語彙，熟語，表現などを網羅する資料となっている。第２部は読み応えのある精読向きの英文に注釈を付した20章から成る。

この教科書は全体で300頁を越え，とても半期の授業ではこなしきれない。各章の分量も，必ずしも１回分の授業時間にあわせてはいない。これは，教科書会社が発行する教科書のように，特定の断片的な内容に絞ることはせず，広く網羅的に題材を求め，授業の便宜よりも内容の面から章立てを考えたからである。従って，授業での利用にあたっては，各担当教官が，受講生の所属学部・得意不得意分野などを勘案して必要な箇所を取り上げることになり，授業の進行方法も独自に定めることが期待されている。受講者には，授業で取り上げられなかった部分も在学中に自学してほしいものであるし，資料の部分を中心に，将来にわたって手許に置き，レファレンスブックとしても活用していって欲しい。

第1部第1章から第9章：書き下ろしの章

・第1章：「英語の学習方法：参考文献や検定・この本の説明」
学習の心構えを説き，辞書・検定試験・教材などについてのイロハを解説。

・第2章：「英語の発音」
音声学の基礎に基づき，音声に関する体系的な知識及び発音のコツを身につけさせる。

・第3章：「語彙力をつけよう」
語彙構成の法則性に触れながら，ボキャブラリー・ビルディングのヒントを与える。

・第4章：「動詞に関する知識」
句動詞と前置詞付動詞の差異，目的格補語の様々，断定的述語と叙実述語，直説法・仮定法・想定の should 等，高度だが役立つ動詞に関係した文法事項を解説。

・第5章：「構造の知識」
新旧情報，文末重点，倒置，強調構文，二重目的語文と与格文，能動態と受動態等，語順に関する法則を解説。

・第6章：「英文解釈・英作文で誤りやすい文法項目」日本人学生の典型的誤りを紹介する。

・第7章：「電子メールでの英文の書き方」
メール上の英作文作法を豊富な例と共に英文で紹介。

・第8章：「英語の諸相」
英語の起源，英米語の差，英語と性，世界語としての英語とインターネット等の英語の諸相を英文で解説。

・第9章：「英語圏の社会と文化」
イギリスの政治，食文化，宗教，階級，経済などの現況を英文で解説。

第1部第10章から第16章：資料の章

・第10章：「日常生活の語彙」
衣服・食器等の日常品，税金・犯罪等の社会生活関連用語といったグループごとに単語を網羅的に紹介。

・第11章：「抽象語彙：覚えておきたい単語」
九大生として最低限身につけてほしい形容詞・名詞・動詞を独自に選定，全てに独自の例文を付す。

・第12章：「語彙の整理箱」
効果的な単語の獲得のため，反意語・接頭辞を同じくする語・和製英語等の項目別に単語を網羅的に提示。

・第13章：「基本動詞を用いた熟語」
bring, come, find, put, turn 等の基本動詞を含む熟語と独自の例文を提示。熟語力不足の学生に役立つ。

・第14章：「覚えておきたい口語表現」
場面に応じた適切な口語英語表現が出てこないもどかしさの解消を目指し，場面別の英語表現を紹介。

・第15章：「補部：動詞・形容詞が何を従えるか」
正確な作文のために，動詞・形容詞が何をとり，何をとれないかに関する正誤表を掲載。

・第16章：「学術的教養：学部別語彙表現」
文学部の映画用語，理学部の元素名，医歯薬学部の栄養素名等，一般に通用する学部別専門語彙を提示。

第2部：リーディングの章

20章の注釈付英文からなる。それぞれ内容が濃く，話題も豊富で，文系理系の各分野をカバーしている。

1章はクローン問題，2章は意識の過程，3章は英語の脅威，4章は大人の言語習得，5章はゴキブリの行動のメカニズム，6章は大気汚染問題，7章はホーキング博士の物理理論，8章は文化の差異，9章はアレルギー問題，10章は随筆，11章は動物のコミュニケーション，12章はルソーとその時代，13章はクローン技術と精神のコピー，14章は英語の重要性，15章は動物の感情，16章は尊厳死，17章は宇宙における生物論，18章は日中の伝統医学，19章はディベート，20章は携帯電話の安全性の問題を取り上げている。

教科書の狙い

以上の内容紹介からわかるように，この教科書の目的は，大学生に不足がちの英語の知識を補うことにある。特に口語表現や音声に関する知識（かなりの箇所に代表的な第1アクセントの位置も表示している）を中心に，英語による発信に役立つような知識や語彙を多く含んでいる。いずれも丹念に辞書その他の参考文献にあたれば突き止められる内容ばかりではあるが，それを体系的にまとめて学習する機会を提供している意味は大きく，効率的な英語学習に貢献しているものと思う。また，電子メールや今日的な話題など，若い学習者の興味を喚起することにも努めた。

編集委員一同，この教科書が九州大学における英語教育に大きな成果をあげるものであることを祈っている。また，広く九州大学以外の大学の学生や，一般社会人英語学習者の手助けにもなれば，不眠不休の編集作業にあたった者としては限りない喜びである。感想や誤りの指摘等，随時お知らせくださるよう切にお願いして筆を置くことにする。

（言語文化研究院）

教育方法改善の試み

Laputa Project

岡野（おかの） 進（すすむ）

Laputaって何？

Laputaということばを聞いて，皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？　宮崎駿の「天空の城ラピュタ」を思い出すかもしれませんね。あるいは，スウィフトの「ガリバー旅行記」に出てくる，架空の空飛ぶ島，<ラピュタ島>の方でしょうか。（もっとも，宮崎駿も<空飛ぶ島>のヒントは「ガリバー旅行記」から得たのでしょうから，どちらにしても，あまり変わりはないかもしれませんが。）実はLaputaというのは，このプロジェクトで使われているサーバ，つまり，コンピュータの名前なのです。ところで，小学館のランダムハウス英語辞典で<Laputa>をひくと，「ラピュタ島：Swift作の*Gulliver's Travels*に出てくる架空の空飛ぶ島；住民は，ばかげた計画や，えせ科学実験に夢中になっている」とあります。私たちのプロジェクトもまた「ばかげた計画や，えせ科学実験」であるのか，あるいはそうでないのか，それはこれを読んでいる皆さんの判断にお任せいたします。

新しい学習環境の登場

Laputa Projectは，九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトに選ばれ，九州大学から研究助成金の交付を受けて実施しているプロジェクトです。なぜ，このプロジェクトが生まれたのでしょうか？　それは，コンピュータが身近なものとなり，インターネットが普及するにつれて，新しい学習環境が誕生したからです。これまでは紙と鉛筆を使い，学習してきたわけですが，これからはコンピュータを使って学習することがごく普通のことになります。コンピュータは確かに道具には違いありませんが，人間とコンピュータとの関係は，例えば人間と鉛筆の関係と同一ではありません。人間とコンピュータとの関わりで実現されているのは，ドイツのメディア論の思想家，キットラーが言うように，「人間とマシンと，そしてマシンを作動させるプログラムとの共生」なのです。この種の共生関係は人類の歴史上かつてなかったものです。こう言うと大げさに聞こえるかもしれませんが，私たちは新しい世界の誕生に立ち会っているわけです。こうして成立した世界の中では，外国語の学習も当然のことながら，変化せざるを得ません。では，どのように変えていけばいいのでしょうか？　それを研究するのが，Laputa Projectなのです。

大きなこと言ちゃって，実際には何をやっているのですか？

ハイ，ハイ。話をぐっと身近なレベルに戻して，実際に何をしているのか，それをお話しましょう。実は或るソフトウェアを使って，英語とドイツ語の授業をしています。このソフトウェアは3D－IES（3 Dimension Interactive Education System）と名づけられており，コンピュータ・ネットワーク上に3次元の仮想空間を作りだします。また，これは仮想空間とチャットシステムを実装しており，リアルタイム・双方向のコミュニケーションを可能にします。

まず，コンピュータの前に座り，3D－IESのアイコンをクリックします。すると，ユーザIDとパスワードを入力するよう，要求されます。指定されたものを入力します。それらの認証が済みますと，あるパネルが立ち上がり，自分が行きたい仮想空間を指定しますと，つぎのような画面になります。

画面は3つのパートから構成されています。左の3分2ほどを占めているのが3次元の仮想空間です。空間に人形のようなものが見えますね。これはアバターといいます。アバターは英語のavatarで，また例によってランダムハウスによれば，「【3】［インターネット］アバター：（仮想空間における自分の）化

身」と定義されています。アバターは皆さんの分身となって仮想空間を動き回る人形のようなものといっていいでしょう。アバターは髪の色，衣服，持ち物など編集可能になっていますので，オリジナルなアバターを作ることも可能です。また，近々にドイツ人のアバターも登場する予定です。

空間は4空間用意されています。大学のキャンパスをイメージしたヴァーチャル・キャンパス，宇宙船の内部を思わせる，SF的な空間ヴァーチャル・ラボ，ほのぼのとしたトンネル・パーク，そしてローテンブルクです。ローテンブルクはドイツの中世都市，ローテンブルクのイメージに基づいて作られています。ここでお見せできないのが大変残念ですが，なかなか可愛らしい空間で，女子学生の皆さんに人気があります。一見の価値ありというところ，です。昨年3D－IESを使ったドイツ語の授業に出た学生さんにアンケートをしたところ，ドイツ語はドイツの空間で受けたい，そうすれば学習効果も上がる，との結果が出て，それで作られました。したがって，ローテンブルクは受講生の要望から生み出されたといっていいでしょう。仮想空間はインターネット上に作られています。インターネットに繋がっている環境であれば，世界のどこからでも，ローテンブルクへ足を踏み入れることができます。皆さんがこの空間へ入ったときにすぐそばに見える人は，もしかすると札幌にある北海道大学のマシンから，アクセスしているのかもしれません。

仮想空間の下にあって，ボタンがたくさんあるのはNCPパネルです。ここにはさまざまな機能が統合されて，盛り込まれています。まず，カード機能というものがあり，これは仮想空間で使う，名刺のようなものです。メール機能があります。登録されて，リストに記載されている人にメールを送ることが可能です。しかし，ここで一番重要な機能はファイル送受信機能です。これを用いることで，教官が受講生にファイルを送ったり，逆に受講生が教官にファイルを送ることも可能です。ネットワークの上で，レポートの提出ができるということですね。

右側を占めているのは，チャットの画面です。3D－IESはキーボード入力により，テキストでチャットを行います。右下のChatボックスで入力した文字が，上のChat Logのボードに出力されるようになっています。

授業の話を訊きたかったのですが…….

そうでした。授業ですね。どういう授業をやっているのか。現在，英語は4人の教官（鈴木右文，井上奈良彦，高橋里美，志水俊広），ドイツ語は1人（岡野），5人の教官が3D－IESを使って授業を実施しています。授業の内容ですが，やはり，それぞれ違った使い方をしています。授業の大部分をディベートの時間に充てている教官がいます。また，別な教官はこのように考えています。自動車学校の授業が学科と実技に分けられているように，英語の授業も学科と実技とに分け，3D－IESを使う授業はいわゆる実技の時間と捉え，とにかく英語を実践させる。それで，英語を使ったゲーム形式の授業をやっています。そのうちのひとつに「仮想お見合い」があります。受講生を男，女，男の父，男の母，女の父，女の母，見合い世話人とに役割を決め，筋書きを決めずに，チャットさせるというものです。おもしろうそうですが，どんな授業なのでしょうか。どうです，皆さんも一度参加したくなったのではありませんか。

ドイツ語を担当する教官から見て仮想空間が興味深いのは，ドイツ語を媒介にして一つのアクションが生じることです。たとえば，「お名前は？」と訊けば，「ハナです」と返ってきます。これも一つのアクションです。何だ，そんなことか，と言われるかもしれませんが，これは大事なことです。そこからドイツ語をツールとして使うという喜びが生まれるからです。ローテンブルクの空間を歩きながら，ドイツ語でチャットをしていると，さながらローテンブルクにいるような気にはなれませんが（それは無理），日本にいるにもかかわらず，ドイツ語を使うことが不自然でなくなり，ドイツ語の時間は単位をとるための時間ではなく，コミュニケーションのツールとしてのドイツ語を学ぶ時間だということが，身をもって実感できるはずです。

また，仮想空間ではハンドル名（ニックネームのようなものです）を使い，アバターを介して，アクションを起こしますので，リアルな人格ではなく，匿名の存在となります。これも受講生には，少なくともドイツ語の受講生には，好評です。人間関係にあれこれ気を使わず，気楽にチャットできますので。

なるほど。で，もっと何かないの？

では，サイバー・ユニバーシティー（サイバー・U）の話をしましょう。これは5大学（北大，東北大，名古屋大，阪大，九大）をネットワークで結び，単位互換の授業をしようというものです。そのために，現在，九大と北大との間で英語・ドイツ語の共同授業が行われています。また，講師，受講生が少ないために，授業科目として成立しにくい少数言語（例：アラビア語，インドネシア語など）の授業も計画されています。

これは受講生の立場からすれば，5大学，もしくは7大学の教官の中から授業を選べますので，選択肢が広がるという意味で，歓迎すべきことでしょうが，担当教官はかつてない競争にさらされることになります。

（言語文化研究院）

教育方法改善の試み

VTによる環境教育の実践

友清彬昶（ともきよあきひさ）

最近は，テレビ，ラジオ，新聞等で地球環境問題に関する番組，ニュースそして記事が現れない日は無いほどです。国公私立を問わず大学では，環境の文字が付いている学部，学科，研究科の数が激増しています。九州大学も例外ではありません。環境問題に十分配慮しない企業は生き残れないといわれています。このような現象はつい最近のことであり，10年前の状況と比較すると，その様変わりは驚くほどです。多くの人がこれほど環境問題に関心を持つようになったのだから，問題は解決に向かい始めたのかというと，決してそうではなく，刻々悪化しています。状況の深刻さに多くの人が気づき，何とかしないと，と考え始めただけであると理解すべきでしょう。私は1989年の３月，見ていたテレビの画面にくぎづけになり，衝撃を受けました。それ以来，環境問題に関する番組を録画するようになりました。これらを環境教育の資料にしたいと，機会を狙っていたところ，ＶＴ映写可能な講義室が整い，1992年「一般物理学Ａ」の講義で実行することになりました。受講生に大変好評なスタートでした。1994年の教養部改組にともなうカリキュラム改変後は，少人数ゼミの中で継続しています。これらのＮＨＫの番組は大変よくできていて，一人の教官がこれだけの情報を収集することは不可能です。ですから，これらの番組は大変すばらしい教材だと思います。

これまでに録画した番組を，放映年月日順に紹介します。各番組最後の（　）内は放映時間です。

1989年　ＮＨＫ特集：地球汚染
　３月19日：大気に異変が起きている：オゾン層破壊，温室効果がもたらす地球の悲劇（60分）
　３月20日：海はひそやかに警告する：汚染が進む地球の海と動物の悲劇（50分）
1989年　ＮＨＫスペシャル：シリーズ21世紀・今原子力を問う
　４月５日：危険は克服できるか・巨大技術のゆくえ（50分）
　４月６日：原子力は安いエネルギーか（50分）
　４月７日：推進か撤退か・ヨーロッパの模索（50分）
1989年　ＮＨＫ90分対論・時代を読む
　９月16日：「危機にたつ地球環境」高橋治，宮本憲一
　　果てしなく拡大する環境破壊　▽地球を守るには，各人が何をすれば良いのか　▽貧しい豊かさか豊かな貧しさか　▽白山ろくから地球へのメッセージ（90分）
1989年　ＮＨＫスペシャル：シリーズ21世紀・地球は救えるか
　10月３日：汚染の中の豊かさ：国境を越えて広がる汚染（50分）
　10月４日：温暖化防止へのシナリオ：検証米国環境庁の規制案（50分）
　10月５日：熱帯雨林消滅：森林破壊はなぜ進む？（50分）
1989年　ＮＨＫ教育ＥＴＶ８
　10月５日：点検・日本の酸性雨；酸性雨の現状と影響（45分）
　12月11日：海はよみがえるか・解明される内海汚染のメカニズム（45分）
　12月28日：アマゾン熱帯雨林を守れ；ホセ・ルーゼン・ベルガー，立花隆（45分）
1990年　ＮＨＫワールドＴＶスペシャル
　10月25日：「地球加熱・2048年からのメッセージ」▽温室効果がこのまま進むと我々の将来は？（45分）
1990年　ＮＨＫスペシャル「救え・かけがえのない地球」
　10月27日：▽第一部・いま私たちに何ができるか，他　▽第二部・グリーンパワーが企業を変える，他（120分）
1991年　ＮＨＫ列島ドキュメント
　７月15日：「越境酸性雨に挑む」▽深刻な中国の被害（45分）

7月16日：「サンゴの海が死んでいく・巻貝異常発生のなぞ」海からの警告（45分）

1992年　ＮＨＫスペシャル（再放送）

9月5日：「救え・かけがえのない地球・破局回避のシナリオ」大量消費社会は変えられるか　▽国境の壁は越えられるか（120分）

1995年　ＮＨＫスペシャル

8月6日：「調査報告・地球核汚染・ヒロシマからの警告」柳田邦男（90分）

1996年　ＮＨＫスペシャル

4月26日：「終りなき人体汚染チェルノブイリ10年」新事実・放射能が脳を破壊する（50分）

6月7日：旧ソ連・広がる核汚染：チェルノブイリ原発・残された住民たち（45分）

1997年　ＮＨＫクローズアップ現代

2月21日：「産廃紛争列島」全国250ヶ所でトラブル噴出（30分）

1997年　ＮＨＫ教育ＥＴＶ特集

5月14日：「よみがえれ・海の森林」（45分）

1997年　ＮＨＫスペシャル（再放送）

11月23日：しのびよる環境ホルモン汚染（55分）

1998年　ＮＨＫ教育ＥＴＶ特集「チェルノブイリ事故12年目の報告」

4月27日：(1)埋葬される村々（45分）

4月28日：(2)核の町の住民達「プリチャピ」(45分)

1998年　ＮＨＫスペシャル

8月1日：海・知られざる世界　④深層海流(50分)

1998年　ＮＨＫスペシャル（再放送）

8月2日：「解決できるか・産廃紛争」環境汚染の不安（55分）

1998年　ＮＨＫ教育ＥＴＶ特集「環境・調和への道」

6月1日～4日，①～④（各45分）

1998年　ＮＨＫスペシャル

10月9日：「環境ホルモン汚染・人間の生殖に何が起きているか」(50分)

12月19日：知への旅レーチェル・カーソン・自然破壊への警鐘「沈黙の春」(50分)

12月20日：「海・知られざる世界・奇跡のバランスが崩れるとき・温暖化による海の異変」（50分）

1999年　ＮＨＫ教育未来潮流

1月30日：「地球と生命のために・環境運動の先駆者レーチェル・カーソン」沈黙の春：シーア・コルボーン，松本侑子，他（75分）

1999年　ＮＨＫスペシャル

2月21日：それはＤＤＴから始まった（60分）

3月21日：世紀を越えて・未知の恐怖・CO_2との戦い（50分）

4月23日：「環境・五大湖からの警告：脳神経の異変と化学物質　▽胎児への影響」シーア・コルボーン：奪われし未来（50分）

講義資料として使ったのはこの一部ですが，これらの番組を見ると，あらゆる地球環境問題の実態と全貌がよく見えてきます。いずれの問題も掘り下げていくと，相互に関連しており人間の日常の生活様式に深く関わっていることが分かります。そして，大気汚染，海洋汚染，森林破壊，地球温暖化，産業および家庭廃棄物，内分泌かく乱物質，原子力発電等，いずれの問題も的をしぼるとそれだけで一学期分の講義量になるでしょう。ですから，環境教育は難しく，いつも迷っています。講義の中でビデオを見たあと，問題の深刻さとそのスケールの大きさに気がめいってしまいますと訴える学生がいて，とまどう場面が何度もありました。しかし，今後も，ＶＴへの録画と環境教育を続けたいと思います。　（理学研究院）

── お詫びと訂正 ──

radix 26号4頁の“世界・日本”「南米を旅して」のタイトルの中で筆者の宮川弘史さんの名前の読みが間違っています。

“みやがわひろし”となっておりましたが，“みやがわひろふみ”です。

お詫びいたしますとともに，謹んで訂正いたします。　（編集委員会）

公開講座

『現代社会の諸問題を考える』を終えて

毛利嘉孝（もうりよしたか）

六本松キャンパスでは毎年秋に公開講座を開催しています。公開講座とは大学を広く大学の外の一般の人にも開放し，いろいろな市民の方にも参加してもらおうというものです。今年度は比較社会文化研究院が担当し毎週土曜日の午後1時半から4時まで2時間半，9月中旬から11月上旬まで8回に渡って講義を行いました。

さて，今回は『現代社会の諸問題を考える』というテーマで講座を企画しました。このタイトルは行きがかり上運営を担当した私がつけました。あとになって何人かの方に「あまりにもタイトルが地味ではないか」との批判も受けたのですが，ふたを開ければ思いの外に（？）多くの方に参加いただき，企画者としては内心ほっとしているところです。

公開講座は現在の大学のあり方を考える際に，とても重要な場です。大学は一見すると大学生を中心に教員を含め大学で働く人々からなる囲い込まれた場のようにみえますが，それだけではありません。大学とは同時に，おそらく「社会的」な存在であって，大学内外に関わらずいろいろな人が「遭遇」すべき場所でもあるべきなのです。

「接触領域」（コンタクト・ゾーン）という言葉が最近よく使われます。この語はもともとはさまざまな異なった文化が接触する地理空間的な境界を表していましたが，こうした場が重要なのはそうした遭遇の場が文化を変容させ発展させていく可能性をはらんでいるからです。それは単純な知識の再生産の場ではありません。大学とは，おそらく現代都市の内部の「接触領域」の貴重な可能性の場の一つと考えられるでしょう。

こうしたことは理念的には語られるのですが，実際には「象牙の塔」という表現に見られるように大学が閉じた空間になりがちな側面もしばしば見られます。公開講座は，社会的存在としての大学というものをもう一度考える絶好の機会といえるでしょう。

こうした大学のあり方自体は私自身の最近の関心でもあるのですが，そうした関心に基づいて今回の講座は企画しました。具体的には，大学の枠組を越えて現実の現代社会を対象にして研究活動をされている先生方にリレー式の講義をお願いしました。主には比較社会文化研究院の先生にお願いしましたが，どうしてもフェミニズムの問題とNPO，NGOの問題をこの中に組み込みたかったので，外部からフェミニズムに関しては九州国際大学の堤要先生，NPO，NGOについては人間環境学研究院の安立清史先生に講師を特別に引き受けていただきました。

私自身もその中の一回の講義を担当したのですが，何よりも受講生の方々の熱心さに驚かされました。講義の後も質疑応答が続き，さらには個別にいくつも質問され，現在でもメールでいろいろと意見をいただいたりします。こうした積極なやりとりは，私にとっても新鮮なものでとても嬉しいことでした。

終了時に簡単なアンケートを実施したので，少しそこから受講者の反応を紹介しましょう。アンケートに答えていただいた方は25人です。内訳は男性11人，女性14人。年齢構成を見ると，20代2人，30代1人，40代1人，50代4人，60代7人，70代6人(無回答4人)ですから，半分以上が60歳以上で，おそらくは忙しい子育てを終えた女性や仕事を引退した男性が多かったのではないでしょうか。そうした方々の学習意欲は，20歳前後の大学生と比べても並々ならぬものがあるようにも感じられます。

さて問題の受講者の満足度ですが，25人のうち「期待通り」と答えた方が15人，「期待以上だった」と答えた方が6人（ちなみに「期待以下だった」と答えた方は1人だけ）ですから，まるで自画自賛のようで恥ずかしいですが講座全体としては大成功といえるでしょう。

少しそれぞれの講座に対する代表的な意見をアンケートから抜き出してみることで内容を振りかえってみましょう。

① 改憲論をめぐる諸問題（横田：担当以下敬称略）
- 憲法の問題を考えながら日本人としての根本や社会の確立の重要性を痛感した。
- 生活の場での考え方の整理ができた。戦後の改

革的制度が危うく感じられる動きが多くあることがわかった。

② 若者文化・犯罪・メディア（毛利）
・価値観の変化について考えさせられた。
・若者の世界がメディアによって厚みやゆとりがなくなっているように思えた。

③ 情報化を考える（杉山）
・「情報」のもつ本質が理解できた。
・メディアと情報の社会的意識や民主主義の変化に対してもつ力について考えさせられた。

④ ドメスティック・バイオレンス：その現状と対策（堤）
・実践的であり，身近な問題として興味があった。
・ジェンダー論や性社会について今後も考えたい。

⑤ 開発と文化：フィリピンと日本の関係から考える（清水展）
・今後の「生きがい」について示唆を与えてくれた。
・文化遺産を残してどう開発するのかというのは日本の問題としてもとても重要だと感じた。

⑥ 地域の共同性をめぐる問題（三隅）
・地域の共同性におけるリーダーシップの重要性がわかった。
・日常生活の大事な問題を学ぶことができ，また深く理解できた。

⑦ NPOの行政とパートナーシップ：アメリカにおけるNPOの展開と日本のNPOの行方（安立）
・現在よく聞く言葉だが，漠然としてイメージしかなかったので具体的によく内容がわかった。
・ボランティア活動をしているので今後の活動のために非常に参考になった。

⑧科学技術政策改革へ向けて（吉岡）
・メディアであまり報道されない原子力政策の実情がよくわかった。
・原子力発電が世界的に縮小傾向にあるのに，日本だけがその傾向に反対する道をとっていることを初めて知った。

アンケート全体を見る限り，「『おもしろかった』のは講義のどんなところですか」という質問には熱心な回答があり，その逆に「『おもしろくなかった』のは講義のどんなところでしたか」という質問にはほとんど書き込みがなかったので，おそらくはほとんどの人に満足していただいたのではないかと感じています。

もちろんわずかですが「一般論」が多かったという批判的な意見もみられました。これは各講師の担当時間が2時間半1回の講義だけであり，どうしても概説中心になったからだと思われます。公開講座のあり方としてたとえば同じテーマで数回に渡って行なったり，あるいは一人の講師が3回から4回担当し，じっくりと議論を展開したりするという講義形式を取り入れることも今後を検討するべき課題かもしれません。

お忙しい各先生のスケジュールを調整するのは大変でしたが，無事なんとか終わることができたのは，講師を快く引き受けていただいた各先生，事務能力の欠落した私を支えてくれた庶務掛の世利さんと受付等の手伝いを毎週してくれた大学院生のみなさんのおかげです。この場を借りてお礼を申し上げます。

（比較社会文化研究院）

「フィールド科学研究入門」と九州大学演習林

西村潤二

1．はじめに

平成12年6月2日(金)夕刻，私は六本松キャンパスの新1号館教室で，九州大学史料室の折田先生による「教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト－代表者新谷恭明－」の試行授業「九州大学の歴史」を受講していた。そして，この日の新聞夕刊各紙には，九州大学が，永年の懸案であった元岡地区新キャンパスの造成工事の着工式を挙行したとの記事が踊っていた。この記事を読んで，あらためて，そうかあれからもう32年も経ったのかという思いにとらわれたのは，決して筆者一人ではなかったはずである。

そう，奇しくも，32年前の1968年6月2日の深夜，米軍板付基地のF4ファントム機が，折りから箱崎キャンパスに建設中の大型計算機センターに墜落炎上し，以後九州大学は所謂「紛争の時代」に入っていくことになるのである。

思えば，九州大学における元岡キャンパスへの移転も含めた教育・研究環境の確保や入試制度をはじめとする各種改革の志向への原点は，実に32年前のこの米軍ジェット機の墜落事故にあったといえよう。

九州大学の六本松キャンパスにおいても，平成6年3月の教養部廃止に伴って，教官はいうに及ばず学生も入学直後からそれぞれの学部に籍をおくこととなり，それまでの教養課程教育科目に代る全学共通教育科目を履修することとなった。

2．「フィールド科学研究入門」の趣旨

「九州大学の改革の大綱案」に基づき，平成9年度から実施されている「教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト」で平成11年度に採択された研究課題「フィールド科学研究入門」は，主に，六本松のキャンパスに毎年入学して来る新1年生を対象として，農学部付属演習林が，その所有する広大なフィールド（福岡，宮崎，北海道の各演習林）において実施する全学共通教育科目の一つである。

人間はその昔，他と変わらない生物の一つにすぎなかったが，数百万年という歳月の中で，言葉や道具を使うようになり，その経験や知識を次世代に伝え集積できるように進化した。その力は20世紀において飛躍的に増大し，自然界から相対的に独立してきた。そして最近になって，生物の設計図を手にするまでに知識は高度化した。それを支えたのが20世紀後半の科学技術であり，大学人はこの科学技術に無限の可能性を求め，邁進している。

こうした努力の甲斐あって，人間はその数を増やし他の生き物を排除し，地球に存在する資源を独占的に利用するようになった。しかしながら，人間には多少なりとも全体を見る目があったようで，地球全体を見ながら，他の生き物と共存できるような仕組みを作らない限り，人間自体が滅亡してしまいそうな状況であると認識するようになった。

地球を見よう。自然を見よう。「空気のように」という言葉について考えてみよう。自然とバランスのとれたシステムを作ろう。そのためには，細分化されたサイエンスと同時に全体を見つめる科学者としての目を養おう。これがフィールド科学の精神である。

3．地域資源プログラムの目的

一昨年に引き続き，農学部附属演習林では，昨年7月末の福岡演習林での「物質循環プログラム」（2単位）に続いて，8月28日(月)から9月1日(金)にかけ宮崎演習林において「地域資源プログラム」(2単位)を実施した。

「地域資源プログラム」は，グローバル化が進行する中でローカル性をどの様に考えるかを基本的視点とする。農山村は，ローカル性が濃く，自然と共生しながら生活してきた地域である。しかし，グローバル化は，農産物，林産物の自給率を大幅に低下させ，山村が主要な産地であったキノコや木材でさえ，産地まで輸入品が来るようになった。そのため，産地ではすべての商品において生産・流通・加工システムが激変するとともに，人口は減り，生活様式や人間関係なども大きく変わり，自然と人間の関係にも変化を及ぼすようになった。それを知ることはフィールド科学に目を向ける動機付けとなるであろう。

また，学生諸君に，自分の足元や身の回りのことを知って欲しい，という要望もこのプログラムには込められている。学生諸君は，卒業後は日本や九州の経済・産業・文化の担い手になることが求められている。その彼らに九州の自然を知ってもらいたいのである。

筆者は，昨年の4月に六本松キャンパスに配属されるまで，演習林本部（篠栗町）に勤務していたこともあり，夏休みを利用して，ほぼ半年ぶりに宮崎演習林を訪問した。以下は，昨春入学の1年生を中心に20名が参加したこの宮崎演習林でのプログラムに，たまたま遭遇することになった六本松キャンパス勤務の一事務官の目に映った講義の印象を綴ったものである。ただ，合流したのが3日目の8月30日の夕方であったので，出発からそれまでの間については，後でスケジュール表を見ながら想像を混じえての文章であることを，あらかじめご容赦願う。

4．宮崎演習林での行程

8月28日(月)　**JR人吉駅集合**

13時にJR人吉駅に集合した一行20名は，宮崎演習林差し回しの車に分乗し，途中，日本バイオ㈱の工場へ立ち寄り，最新のキノコ生産施設を見学の後，一路，宮崎演習林へと向かう。17時，演習林着。オリエンテーション；何を学ぶかについてレクチャーを受けた後，宮崎演習林の教職員全員による歓迎会に臨む。

8月29日(火)　**森林を科学する**

午前中，井上宮崎演習林長による，演習林内の自然林保全試験区の原生林を歩きながらの森林観察，雄大な自然林に囲まれての昼食の後，午後からは，演習林内を流れている川の流域観察をしながら，宮崎演習林熊谷助手による講義「森と水の関係」を受ける。

8月30日(水)　**木材資源について考える**

午前は9時から，飯田教授による「木材資源について考える」の講義の後，10時半に演習林の矢立樹木園へ出発。午後は球磨郡水上村にある上球磨森林組合で木材の集荷や加工システムについて学んだ後，演習林へ戻り宿舎周辺の散策。

8月31日(木)　**地域の文化や生活について考える**

午前中，椎葉村役場のある上椎葉地区へ。平成9年4月開館の椎葉民俗芸能博物館，博物館に隣接する国指定重要文化財である那須家住宅，通称鶴富屋敷等を見学の後，上椎葉ダム公園にて昼食。午後からは講師である比較社会文化研究院・三隅助教授の指導の下に，村役場へ出向き，地元の古老の人を相手に2グループに分かれ，椎葉村（山村）の歴史・文化・産業・生活についての聞き取り調査を行った。

9月1日(金)　**修了式**

アンケート記入後，班ごとに，各自の部屋等を整理整頓。10時半，演習林玄関前にて記念撮影の後，全演習林職員の見送りの中，いよいよ一行は一週間滞在した宮崎演習林を後にして人吉へ向かう。12時頃，それぞれ，JR人吉駅，高速バス停まで送ってもらい解散。

5．九州大学演習林の歴史

九州大学演習林は，農学部の開設に先立つこと7年，本学の開学（医学部，工学部）の翌年，1912年（大正元年）12月に大学における基本財産林として，当時の樺太庁からの移管により樺太演習林が設置されたのをもって始まる。同年同月に朝鮮演習林（のち南鮮演習林と改称）を設置，翌1913年（大正2年）12月には台湾演習林が設置された。

1919年（大正8年）の農学部設立，1922年の林学科発足に伴い，大学演習林は農学部附属演習林となったものであるが，当時有していた樺太，朝鮮，台湾の各演習林はいずれも外地にあり，福岡市からは距離的にも遠く，学生，教官の実習林としては不便であった。そこで，1922年（大正11年）9月の早良演習林（福岡市西区）の設置に続いて，同年10月に糟屋郡篠栗町及び久原村（現久山町）に糟屋演習林（現福岡演習林）が設置された。

その後，1926年（大正15年）1月には北鮮演習林が設置され，同年から，樺太演習林は収益を上げるようになった。当時は，九州大学だけの独立した特別会計であり，年度末の剰余金は資金として繰り入れ，翌年度に繰越使用ができた。例えば1935年（昭和10年）の演習林の年収入は支出の倍以上であって，例年，演習林のこの余剰資金は，医学部の設備拡充等に用いられていたが，演習林の拡充整備にも充てられるようになった。1939年（昭和14年）の民有地買上げによる宮崎演習林（宮崎県椎葉村）の設置はその結果である。

6．宮崎演習林の概要

宮崎演習林は，宮崎県東臼杵郡椎葉村大河内に所在する。本演習林一帯は，熊本県の五家荘とともに九州山地のほぼ中央部に位置し，山間僻地の代表的地域である。

気候は，山岳地帯ゆえに年降水量が多く（福岡市のほぼ倍），気温の年較差，日較差ともに大きいことが特徴である。

宮崎演習林は，1939年（昭和14年）に当時の民有林購入によって設置したことはすでに述べたが，取得当時は，民有林時代に大規模な伐採が行なわれ，その跡地は二次林的に更新した低質広葉樹林地帯となっていた。これを大学演習林にふさわしい教育・研究のフィールドへ林種変換するため，土壌の調査，試験的植栽，生長量の調査，林道の新設などの科学的方法による森林の回復に意が注がれた。戦後の，わが国の高度経済成長期の住宅政策に伴う木材需要による拡大造林政策によって，九州における奥地山岳地の天然林も次々と伐採され，スギ，ヒノキの人工林へと林種変換が進み，演習林周辺の天然林が急速に減少する中，演習林では，森林本来の持つ水源林としての役割や，山地崩壊の防止などを考え，できるだけ天然林を残しながら，その中に人工林を作る方式（細胞式森林造成）を採ってきた。その結果，現在では全宮崎演習林の約60％にあたる1,620ヘクタールが自然林保全試験区に設定されている。九州山地の中でも，これだけまとまって一箇所に存在する天然林としては貴重なものであり，地元の椎葉村ではこれを「九大原生林」と呼んで観光パンフレットに載せているほどである。

7．西南日本屈指の自然林ー樫葉国有林ー

この自然林保全試験区の中での中核をなす存在が，三方岳自然林保全区の約700ヘクタールであるが，この自然林保全区のある三方岳団地に隣接して，熊本森林管理局・日向森林管理署管轄内の「樫葉国有林」ー所在地宮崎県東臼杵郡南郷村ーには西南日本屈指の自然林が大面積に残存している。

この「樫葉国有林」は，温暖な低地に成立する常緑広葉樹林と冷涼な山岳地帯に成立する落葉広葉樹林，並びにこれらの森林にはさまれて出現する中間温帯林という3つの森林が，とぎれることなく連続して存在する完全な天然林であり，西南日本でも屋久島以外では見ることのできない学術上貴重な森林である。九州大学では，この貴重な天然林である「樫葉国有林」を農学部附属演習林宮崎演習林の一部として取得したいという構想を持っているとのことだが，これが実現された暁には，ひとり九州大学のみならず，他大学や他の研究機関の学生や研究者による広範な相互利用も可能となり，関係者各位の努力により，その取得の実現が一日も早からんことを望んでやまない。

8．椎葉村に伝わる平家落人伝説

椎葉村は，行政的には宮崎県東臼杵郡に属するが，地理的条件や同所への交通の便からみると，宮崎県というよりも，むしろ，熊本県人吉市及び同県球磨郡の経済・文化圏内にあるといえる。というのも椎葉地方は江戸時代初期に幕府直轄の天領となったが，幕府は，同地方に代官などは置かずその支配を，人吉の相良氏に委ねておさめさせたからである。俗に「相良七百年」といわれるように，鎌倉時代の初期から明治の新政府

による版籍奉還まで，人吉・球磨地方は一貫して相良氏によって治められた。このように，南北朝や戦国の世の争乱期を乗り切り，江戸時代初期の幕府による厳しい大名取り潰し政策を免れて，ともかくも鎌倉時代から明治の世を迎えるまで，七百年にもわたって一貫して同一地方を治めた相良氏のような例は，全国的にみても珍しく，他には薩摩の島津氏，対馬の宗氏などをかぞえるぐらいである。

椎葉村は，総面積に占める林野率が96%にも及び村内の大部分は山林原野で覆われている。今でこそ，自動車道路網の発達により，福岡市からでも3時間程で行けるようになったが，その昔は日本の三大秘境の一つといわれ，現在でも深山幽谷の鬱蒼とした山林地帯の奥深さに変わりはない。村民の生活や習慣には，今なお中世の遺風が色濃く残っているようにみえる。それゆえに椎葉村は平家落人伝説の格好の隠れ里として語られてきたのであろう。

1185年，壇ノ浦の合戦に敗れた平家の残党は，他に拠るべき処もなく，海，陸より諸方に離散した。これらの平家落人伝説の地は，九州，四国を中心に，全国に百ヶ所をこえるといわれている。熊本県五家荘と並んで椎葉村は九州の代表的な落人の里として知られている。

椎葉村に伝わる平家伝説は，屋島の戦いで矢合戦の最中に平家方の大船団の中から漕ぎ出てきた一艘の小船の上の扇を見事に射落としたことで有名な弓の名手那須与市の弟で大八郎なる人物が，平家の落人追討のため，椎葉の山中深く分け入り，平家残党の鶴富姫と恋仲になったが，やがて，鶴富姫懐妊中に，大八郎は鎌倉からの帰国命令により引き離されるといういわば悲恋物語であるが，この上椎葉の鶴富屋敷にまつわる言い伝え以外にも，椎葉村ではいたるところに平家伝説の跡が認められるという。

9．おわりに

21世紀をむかえ，人類は，今日の著しい科学技術の進歩に貢献してきた石油，石炭，天然ガスなどの化石燃料の枯渇，開発による自然環境の破壊，森林の消滅やそれに伴う二酸化炭素の急増と地球温暖化，酸性雨等，ともすれば生物の生存の根幹を揺るがしかねない，かつて経験したことのない深刻な問題に直面している。そして，これらの諸問題の解決には，森林が大変重要な役割を担っていることが次第に明らかになりつつある。

森林は，むろん一義的には，我々の生活と暮らしに不可欠な木材の供給源としてのものであるが，同時に山崩れを防止したり，水を貯める水源ダムとしての役割を果たしている。さらに，二酸化炭素を吸収して地球温暖化を防止したり，また何よりもストレス社会に生きる都市住民にとっては，自然と触れ合うことにより，格好の休養と癒しの場を提供してくれる。また，森林は，石油などの化石燃料と違い，長い周期を必要とするものの再生可能な資源である。この様な森林の持つ多様性に着目し，その森林（資源）の保全，育成，利用に関する研究，さらには，森林と人間活動との係わりに関する研究が，今，強く求められている。今回の，この宮崎演習林におけるプログラムに参加した受講生諸君の中で，真に今後の自己の進むべき道を選択する際の一助とし得た者が一人でもいたならば，今回のこの合宿形式のプログラムは，それだけで意義があったといえるのではなかろうか。

最後になったが，この稿の，特に「フィールド科学研究入門」の趣旨並びに「地域資源プログラム」の目的についての項を書くにあたって，演習林の飯田教授には，格別のご教示をいただいた。また井上林長をはじめとして宮崎演習林の教職員の方々には，滞在中，大変お世話になった。受講生共々，この場を借りてあらためて感謝する。

なお，このプログラムは，昨年10月に北海道演習林においても実施された。今年も福岡，宮崎，北海道の各演習林でそれぞれ実施される予定とのことである。これを読んでいる，貴方（女），そう貴方（女）が，今年，このプログラムのどれかに参加したら，受講者の立場からの感想を，ぜひこの「RADIX」で聞かせて欲しい。　（比較社会文化学府等事務部）

文章の中で，戦前の海外にあった演習林については，当時，使われていた名称をそのまま使用した。

サークル紹介

弓道ってなぁに？

文学部３年　仲田芽衣（なかた めい）

「弓道」というものにみなさんはどのようなイメージをお持ちでしょうか？　あの袴が格好良い，おもしろそう，難しそうなどと様々なイメージをお持ちでしょう。当然，ただ弓を引いて矢を的に中（あ）てるだけのスポーツと考えている人もいるでしょう。しかしながら，弓道では「体配」という弓を引く作法があり，この作法に従って弓を引きます。初めのうちはとても難しいものですが，練習を重ねていくうちに次第に頭と体が理解していくようになるものです。またよく中たる人が弓を引いてるのを見ていると，的に中てることは簡単なことであるように思えますが，実際してみると案外思い通りにはいかないことに気付きます。大学で一般的に行われている弓道では射位（弓を引く時に射手が立つ位置）から28m離れた所にある直径36cmの的を狙います。初心者が初めて引いた時などはたいてい的には中たりません。しかし，難しいからこそ上手く弓を引いた時の感動は大きく，中たった時の爽快感は他では得られないものがあります。

現在私たち弓道部は１年生は田島寮内にある六本松道場で，２年生以上は箱崎の松原門のすぐそばにある本学道場で練習しています。普段は別々に練習していますが，毎週土曜日は１年生から３年生まで合同で箱崎で練習を行っています。普段の練習ではお互いがお互いの射を見合って指導し，より良い射ができるよう日々努力しています。

夏合宿での全体写真

他のスポーツと同様に弓道にも試合はあります。男子は主に５人１組，女子は３人１組のチームになり，一人一人がそれぞれ４本の矢を引くことによるチームの的中数によって争われます。的には中たりさえすればよく，的のどこに中たっても中たれば○，中たらなければ×として記録されます。私たちの部では３月から12月にかけて試合があり，その数はかなり多いため，忙しい月などは日曜日ごとに試合があったりすることもあります。試合は規模の小さなものから大きなものまでいろいろありますが，年間を通しての大きな試合のひとつに七大戦があります。昨年は京都大学で行われました。そして夏に負けないくらい熱い試合の結果，女子は優勝することができました。全員が一丸となって一生懸命戦った結果だったので，優勝が決まった時はみんなで飛び上がって喜びました。それとは別に，めったに会えない他の六大学の人たちと交友を深めることができ，楽しい時をすごせるのも部活ならではのことだと思います。

現在私たちの部には１年生から３年生まで男女合わせて30人くらいしかいませんが，一人一人が一生懸命練習に励んでいます。ここに書いたことは九大弓道部のほんの一部であり，これを読んだだけではいまいちわからないことも多いでしょう。そこで，興味をお持ちになった方は是非一度私達の練習を覗いてみて下さい。

七大戦で優勝した時（京都大学弓道場）

新任教官自己紹介

「クワガタ学」の魅力

荒谷（あらや） 邦雄（くにお）

はじめまして。この度，京都大学から大学院比較社会文化研究院に参りました荒谷と申します。

私の研究内容を，いわゆる専門分野で表わすとすれば，「昆虫系統分類学」や「昆虫生態学」，「昆虫行動学」といった類になるでしょう。しかし，私自身はあくまで自分は「クワガタ学」をやっていると思っています。「専門分野の枠を超えて」といえば聞こえはいいのですが，要するに，とにかくクワガタムシのすべてが知りたいのです。

と言うのも，クワガタムシと言えば，夏の風物詩として古くから親しまれている昆虫ですが，実は，その研究は意外なほど進んでいないのです。

例えば，クワガタムシという名前の由来にもなっている魅力的な雄の大アゴ（よく角と誤解されますが，実際には牙の変化したものです）一つをとっても，そこには進化論で有名なダーウィン以来，多くの研究者の心をとらえてきた大きな謎が残されています。

一口に大アゴといってもその形態や発達の程度はクワガタムシの種類によって様々です。雄が身体の長さの倍近い巨大な大アゴを持った種もいれば，中には，雄でも大アゴがほとんど発達せず，外部形態に性的二型（雌雄差）がほとんどない仲間もいます。また，性的二型の強い種の中には，雄の形態にこれが同種かと思うくらい極端な種内変異が見られる場合もあります。

こうしたクワガタムシにみられる様々な性的二型と雄の種内変異がクワガタムシの系統の中でどのように進化し維持されてきたのかという大問題はいまだに解明されていません。大アゴの変異の遺伝的背景や繁殖戦術などの行動特性との関連についても不明なことばかりです。

まさにクワガタムシの魅力一つ一つが系統分類学や行動生態学，進化生物学をはじめとする現代の生物学に大きな課題を与えてくれているのです。これからもその魅力に少しでも近付けるよう研究を続けていきたいと思っています。

（比較社会文化研究院）

自己紹介

石川（いしかわ） 健（たけし）

昨年の10月から，比較社会文化研究院・基層構造講座の助手に着任いたしました。どうかよろしくお願いします。

出身は福岡県で，高校の頃から市内の学校に通い，その後九州大学の教養部を経，箱崎キャンパスで学部生活を送りました。学部卒業後は，比較社会文化研究科に進学し，そのまま現在にいたっております。このように高校時代からほぼ15年近く，箱崎周辺と六本松を行ったりきたりしながらすごしています。

専門分野は，考古学なかでも九州を中心とした縄文時代の終わりごろ，日本で稲作農耕が本格的に始まる弥生時代の直前段階における，土器その他もろもろの考古資料を用いて，当時の社会や文化について研究しています。将来的には狩猟採集活動を基盤とする縄文時代から，稲作などの農耕活動を生業の基礎とする弥生時代への移行過程における文化・社会の動態を研究したいと考えています。

気を引き締めてゆきたいと思いますので，どうぞよろしくお願いいたします。

（比較社会文化研究院）

新任教官自己紹介

自己紹介

鏑木（かぶらぎ） 政彦（まさひこ）

昨年10月１日付けで比較社会文化研究院に助教授として着任しました。生まれは福島県，ただし薩長にいまだに恨みをもっている（？）と言われる会津とは異なる阿武隈地方南部の出。言語圏で言えば，東北というよりはむしろ北関東に属します。

一浪をして東京外国語大学ドイツ語学科に入学。私が学生生活を送ったのはいわゆるバブルの時代で大卒生の就職は空前の売り手市場，金融機関に就職する同級生が多かったと記憶しています。私はなぜか就職する決心がつかず，大学院浪人をしました。大学院に進学して研究者になろうなどという明確な見通しをもっていたわけではありません。今にして思えば，モラトリアムの延長化という現代青年の特徴をまさに生きていたような気がします。

大学卒業後，ともかく大学院に入ろうと，自活しながら勉強を始めました。幸運にも東京大学大学院法学政治学研究科に合格することができ，10年ほどの時間をかけて，ティリッヒ，ディルタイ，ニーチェなどのドイツ系の思想家を政治思想史的観点から研究してきました。ふつう政治思想史といえば，ホッブズやロックなど，政治学的文献を残した思想家を扱うのが一般的なのですが，私が扱ったのは神学者と哲学者でした。私にとって政治は，人間の存亡に関わるが故に問題と意識されたのですが，そうした問題を考える際に，そもそも人間の生とは何かという問題にとらえられ，上記のような思想家にひかれたのだと思います。

政治思想史というのは，人間の苦悩や死という問題に関わる学問領域の一つであり，われわれの不安や苦悩の生じる所以を解明することによって，よりよく生きるための条件を考える学問です。大切なのは磨かれた感覚。私自身の感覚はなまくらであるかもしれませんが，みなさんとともに問題を考えていくことで，磨いていきたいと考えています。よろしく。

（比較社会文化研究院）

自己紹介

趙（ちょう） 葵欣（ききん）

私は昨年９月末に九州大学へやって来ました。現在は大学教育研究センターの助教授をしています。ここに来る以前は，北京語言文化大学で働いていました。私の主な仕事内容は，世界各国の留学生に中国語を教えることです。私はこの仕事に生き甲斐を感じています。なぜならこの仕事を通じて多くの様々な民族や文化に触れることが出来るからです。時には18人のクラスで，11から12ヶ国の学生がおり，勢ぞろいするとあたかも一つの小さな「連合国」のようになったこともありました。肌の色が違い，年齢も違う学生が，一緒に等しくまた友好的に暮らしたり，学んだりして，交流を深めていく姿を見ると，人類はまさに一つの大きな家族なのだと感じます。また学生達が一生懸命学び，上達して，一言も話せなかったのが，徐々に私と話せるようになっていくのを見ると，教師としての充実感で一杯になります。

私は言語を教えるばかりでなく，言語について学んだり研究したりするのも好きです。言語とは，各々歴史や文化に沿ってできあがったものであり，言語を学ぶことで，その民族の文化や気質を学ぶことができると思います。また言語の学習過程について，非常に興味があります。子供達は，なぜ速くそして上手に言語を学ぶことができるのでしょうか。それに対し，成年になって外国語を学ぶ時に，なぜ大きな困難を感じてしまうのでしょうか。これをはじめ多くの問題が，なお不可解なままです。私の研究分野は言語学で，92年に華中師範大学中文系を卒業後，同校で現代中国語専攻の修士課程に進学し，95年に修士課程を卒業してから，北京語言文化大学に勤務してきました。主な研究テーマは言語習得についてです。

今回初めての来日にもかかわらず，見知らぬ国だという感じは受けませんでした。今の季節，九大のキャンパスや通勤の道中では，金木犀の香りが漂ってきて，素晴らしかった大学時代を彷彿させます。私の母校は「桂子山」と呼ばれる金木犀の名所にあり，毎年秋が来ると，まさに「十里桂花香」（十里に漂う金木犀の香り）に包まれるからです。

（大学教育研究センター）

（翻訳：文学研究科博士課程２年　河野真人）

新任教官自己紹介

…「力学」の講義の準備中…

原田（はらだ） 恒司（こうじ）

昨年８月１日付けで箱崎から配置転換になりました。専門は素粒子理論で，強い相互作用における束縛状態の研究を行っています。東京工業大学で学部，大学院を過ごした後，３年ほどウロウロと京都，ハイデルベルグ，サンパウロをさまよい，九大に着任しました。それから９年も経ってしまいました。月日の経つのははやいものです。

（もう書くことがない…）

最近講義の準備で，力学，特に重力理論の発展史に関する本を読みました。理科系の学部の１，２年生は，「教養」として力学を学ぶことになっています。力学は物理学全体への良い入門です。しかし，力学を作り上げてきた天才たちは，なにも大学に入りたての学生の頭を悩ませるために努力したのではありません。彼らにとって物理学を作り力学を作ることは，世界を理解するための方法でした。特にニュートンは「運動の法則」と「万有引力の法則」の発見によって人類の世界認識を飛躍的に拡大しました。彼は惑星の運動を正しく説明したばかりでなく，月の引力によって潮の満干を，遠心力によって地球が扁平な回転楕円体であることを，また，そのために地軸が極運動をすることも説明しました。「力学」は，我々を取り巻く現実の世界を理解するための天才たちの「本気」の思索でした。

さて，我々はそうした思索の遺産をちゃんと継承しているでしょうか。確かに，世界を（合理的に）理解するという試みは，「科学者たち」の不断の努力によって目も眩むほどの高みに人類を連れて来ました。今では極微の世界から茫漠たる宇宙まで，かなり多くのことを理解しています。しかし，「普通の人々」はどうでしょうか。理科軽視の愚民化政策によって，日本ではかつてないほど危機的な状況にあるように私には思えます（参照 http://www.NAEE2002.gr.jp/）。「我々を取り巻く現実の世界」への興味が失われつつあるのでしょうか。いつか日本人は地球が丸いことも忘れてしまうかも知れません。（何しろ第２次世界大戦も忘れてしまったのですから。）「力学」が教えるのは，好奇心を呼び覚まして世界に対峙する態度である，とかいろいろ考えながら，講義の準備をしていました。

（理学研究院）

APPOINTMENT IN ENGLISH

Phillip（フィリップ） BACKLEY（バックレイ）

My appointment as an English lecturer in the Research Center for Higher Education was, for me, something of a step into the unknown. The warm and generous welcome I received from my new colleagues in the Department of English, however, soon dispelled the apprehension I had felt before my recent arrival from England.

My role is to teach General English language, which is clearly a difficult subject for many undergraduates. Furthermore, some students feel uneasy about the relevance of foreign language study to their chosen area of specialization. Yet despite these obstacles, students are aware of the potential benefits of improving their English communication skills, and can offer their own personal reasons for doing so.

Although originally from the north of England, my academic life began at University of London, where I graduated with a BA degree in linguistics in 1993, then later, with a doctoral degree in 1998. While my Ph.D. specialization was phonological theory (i.e. a study of the way our knowledge of language sounds is organized), I now look forward to a period of more practical research work involving textbook development for the teaching of phonetics in Japan.

My linguistics teaching career began at University of London, then later continued at University of Luton (also southern England). More recently I have been teaching English language/linguistics at University of Lille (northern France), which has given me valuable insights into the needs of English learners, and also provided a useful base on which to develop my teaching skills here in Japan. My next task is to contribute any native speaker insights I can to student learning at Kyudai, in return for the help and consideration I have received from University staff.

（大学教育研究センター）

第 53 回 九 大 祭

あ と が き

世紀末ネタには食傷気味の方も多かろうが，年末の慌ただしさは，やはり今年は一味違う。先生に限らず誰しも走る師走。年末ではなく世紀末を駆けずり回る。無為に過ごしていてもその時はやって来るのに，なにかしら「けじめ」をつけたいと思うのは，普段「けじめ」のない生活を送っている私だけであろうか。

1000年前の西暦1000年，ローマはキリスト生誕[約]1000年を契機に巡礼者があふれかえり，京都では紫式部がせっせと『源氏物語』を書き継いでいた。100年前のヨーロッパの世紀末に目を向けると，まさに西暦1900年に，新年早々陰鬱な話題で申し分けないが，あのオスカー・ワイルドが死に，ニーチェが死んだ。

これから100年後，（まだ人類が地球上にいると仮定して）1000年後，私たちはどのような「外部評価」（？！）を受けるのであろうか。「前世紀」である20世紀のように「戦争の世紀」というレッテルだけは貼られたくないものだ。

「あとがき」を書いている今が20世紀，めでたく radix が発行され，皆さんに手に取っていただけるのが21世紀ということになる。世紀末のご多用中，玉稿をお寄せいただいた執筆者各位に厚く感謝いたします。 （F）

radix（ラーディクス） No. 27 （九州大学全学共通教育広報）

発 行 日 2001年1月15日
発 行 所 九州大学大学教育研究センター

〒810－8560 福岡市中央区六本松4－2－1
電 話 (092) 726－4525・4526（企画掛）
FAX (092) 726－4530